

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 30 日現在

機関番号：37405

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K11239

研究課題名（和文）高齢期、慢性・虚弱化、終末期患者家族支援としての介護者QOLの定量化に関する研究

研究課題名（英文）Quantifying family caregiver QOL as a way of supporting informal caregivers who take care of elderly, in chronic condition, and deteriorating family member

研究代表者

山口 智美 (yamaguchi, satomi)

活水女子大学・看護学部・教授

研究者番号：60360062

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：超高齢社会の日本では療養期から看取る過程を生きる家族介護者の支援が重要になる。しかし、介護者関連分野の研究は他国に遅れている現状がある。本研究は日本特有のケア文化を重視する尺度の開発・定量化を試みた。日本型ケア文化の質的研究、McGill大学尺度（QOLLTI-F；Choen, 2006）の日本語訳版試験、QOLLTI-Fにケア文化構成要素を加えた暫定版尺度試験、本尺度作成・予備調査を経て本調査に至った。継続試験が必要ではあるものの、関連研究分野の資料となる可能性がある。将来的な応用試験が実現すれば介入時期の査定や方法考案に活かすことで介護者支援及び地域包括ケアシステム運用の一助としたい。

研究成果の学術的意義や社会的意義

少子超高齢社会の我が国では医療施設中心のシステムから地域包括ケアへ移行する過程の中、つまり療養及び看取りの場の中心が在宅等の地域へ委ねられる変化の中で、患者の療養期から看取る過程を共に生きる家族介護者の支援が益々重要になっている。しかし、介護者関連分野の研究は他国に遅れている現状があるため、本研究の成果は資料となり得る。また、海外の尺度をそのまま使用しても拾い上げ難い日本文化特有の要素があることが示されたことは有用な情報だと考える。コロナ禍で助成期間内調査の進捗が妨げられたが、継続試験と将来的な応用試験が実現すれば介入時期の査定や方法考案に活かされ、家族介護者支援に繋がる可能性がある。

研究成果の概要（英文）：With an unprecedented aging society in Japan, supporting family caregivers who provide care for patient through in his/her chronic condition to terminal period is crucial. However, there is a dearth of Japanese literature in this filed. The final goal of this study is to establish a culturally appropriate scale quantifying Japanese family caregiver QOL. Through the study including previous studies such as qualitative study on caring culture, test of Japanese translated version of Cohen's QOLLTI-F, creation of a hybrid scale of QOLLTI-F and cultural elements of care and marginizing all those results, the main scale was developed. While further main test needs to be continued, the outcomes through this series of approach would contribute to the related field. It is hoped that the developed scale will be used as a tool for assessing and monitoring caregiver's state and condition in order to provide appropriate support for family caregivers.

研究分野：Nursing

キーワード：家族介護者 QOL ケア文化 高齢者 慢性状況 終末期

1. 研究開始当初の背景

人間の生活史を締め括る高齢期、慢性・虚弱化から終末期の問題は非常に複雑である。2022年厚労省人口動態統計¹⁾が示す合計特殊出生率は7年連続で低下し、1.26(前年度1.30)となった。他方2005年以降世界第一位となって以降上昇を続ける日本の高齢化率(2022年29.1%)がある。この顕著な世代間人口の不均衡は前述の複雑さを助長する超少子高齢社会の一要因である。類を見ない高度の高齢少子、多死、人口減少の著しい現代日本において、患者・被介護者と介護者・看護者(informal caregiverとprofessional caregiver)の双方が一定程度の尊厳と満足感を維持しながら療養期から看取りの過程を生きることに伴う課題は大きく、病院中心から地域包括ケアへのシステム転換と相まって集中的かつ多方向的な取り組みが急務である。システム変換は多様なステイクホルダーに影響すると同時に、日本の社会文化的文脈の中で人が人をケアする、時により身近な大切な人をケアするという実践の営みであるケアリング文化にも影響する。これは看護を文化的現象と捉える研究代表者の視点であり、先駆的研究者^{2)~7)}も指摘する人々の日常生活の中に文化的行動と意味付けの起源が存在し、民族、地域文化、社会経済的背景との密接な関係が重視される世界観である。

しかし、家族介護者がヘルスケアシステムにおいていかに重要であるかが見落とされる傾向にあった。米国の報告⁸⁾では、家族介護の経済的価値は年間\$196billion(\$1bil. 1000億円)

医療費の約18%に匹敵すると試算され、2013年には4000万人の家族介護者が37000億時間をケアに費やし、その経済的価値は約\$470billionに上ると報告した⁹⁾。ケアの担い手である家族介護者は、病を抱えながら生活する人々にとって掛け替えの無い大切な家族であると同時に、重要なヘルスケア人的資源であるからこそ、家族介護者の心身の健康やQOLを支える分野には発展の余地がある。過去のQOL研究は被介護者に注目が集まり、家族介護者に関する研究が不足する中で、日本文化の特徴を捉えた家族介護者の心身の健康に繋がり得るQOLの可視化及び定量化の取り組みは不可欠であると考えた。

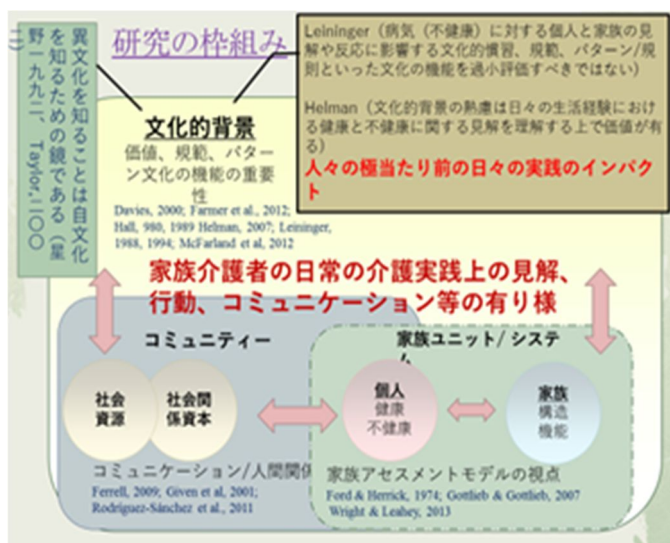


図1. 日本人の個、家族（介護者）の日常実践上の見解、行動、コミュニケーションと社会文化的背景の関係図(山口, 2016)

2. 研究の目的

これまでの研究成果を統合し、日本のケア文化に適した家族介護者QOL尺度の開発・定量化試験を継続して、尺度を作成すること。次段階の応用・実用化試験の素地をつくること。

先行調査でこれまでに明らかとなったこと

日本人のケア文化には独特の文化的要素があり、海外で開発された尺度では捉え難いこと。McGill大学Cohenら(2006)QOLLTI-F¹⁰⁾日本語訳版は他の類似尺度と比べて項目数が16項目と比較的少なく、被験者の負担が少ない。また、その内容はCarer's Own State、Environment Carer's Outlook、Quality of Care、Relationships、Patient Condition、Financialの7つのドメインから成りQOLの多面性を包括している。日本語訳版試験から内容的妥当性(表面的及び理論的)、基準関連(並存的)妥当性、構成概念(収束的)妥当性が確認された。構成概念(因子)妥当性については継続的な検討の余地があるものの、一定程度の妥当性が認められ、尺度の活用可能性が示された。信頼性試験には因子分析、Cronbach's係数を用いた分析を行ったが意思決定、経済、人間関係においてカナダの因子構造と異なる様相を呈した。この点が日本のケア文化特有の文化的要素に関わる部分であると解釈・推測された。また、因子構造は6因子と仮定された。

日本文化に適する尺度開発の次段階としてとを統合した暫定版家族介護者QOL尺度を作成して予備調査を開始したものの、COVID-19の影響を受けたために当初計画よりもデータ収集に遅れが生じた。

3. 研究の方法

(1) QOLLTI-F 日本語訳版を基礎として質的研究から抽出された日本文化に特徴的なケア文化構成要素を投入して作成した 38 項目から成る暫定版家族介護者 QOL 尺度を用いた予備調査を継続した。

(2) 予備調査(1)の結果について統計的手法を用いて精査し、研究チームでディスカッションを繰り返しながら本尺度作成及び調査を行った。

家族介護者の QOL という事象を多面的に捉えつつ、重要となる因子構造について探索的に分析するために病院、老人福祉施設、在宅、ホスピスなどの多様な療養の場を調査フィールドとした。また、被介護者の疾患を悪性新生物に限定することなく、様々な状況下でケアを受けている高齢者、慢性疾患罹患患者及び終末期にある者として、その被介護者をケアする家族介護者を調査対象として協力を依頼した。

用語の定義

本研究において、文化とは人々の日々の暮らしの営みであり (Douglas 他)、ケアを含む日常実践・行動や世界観の形成に影響するものとした。また、Caring Culture (ケアリング文化) とは介護者の認識及びケア実践を具現化する概念である。文化的文脈において caregiver の日々のケア実践、態度、行動、価値観が相互に影響を受け、また与えながら生まれるダイナミクスな現象である (山口、2015, 2023) とした。

4. 研究成果

(1) 暫定版家族介護者 QOL 尺度は 6 因子 38 項目で構成された。得られた 59 件のデータより内容的妥当性 (表面的及び理論的)、暫定版尺度と SOC との正の相関 ($r=.56, p<.04$) を認め、基準関連 (並行的) 妥当性、構成概念 (収束的) 妥当性が確認された。因子ごとに Cronbach's 係数を用いた分析及び項目の精選についてディスカッションを繰り返した。ここでは日本のケア文化要素: 家族意思決定、(八百万の神に) 祈る、思いやり、介護が人生を豊かにする、家族の絆を強める、サービス提供者との信頼関係や助言が影響することが再確認された。本調査項目として除外しないし再投入すべき項目についての議論を重ねた。

(2) 統計的手法を用いて因子及び項目ごとに信頼性を検討した結果、5 項目 (経済支援、交通手段、自責、傾聴、介護の代替者の有無) を除外項目候補とした。更に Overall QOL 得点と全項目の相関分析の結果、相関係数 0.3 程度を示した 1 項目 (介護の代替者の有無) を再投入項目の候補とした。検討を重ねた結果、直接的に介護への満足感を尋ねる項目について試験的に追加することとして、最終的に 6 因子 34 項目と 1 試験項目の家族介護者 QOL 尺度を作成した。倫理審査の申請を行い、承認を得た後に本調査を開始した。コロナ禍の影響が強く残る高齢者医療・介護施設等のフィールド調整とデータ収集には時間を要しており、助成期間を終了した現在もデータ収集中である。ここでは回収された 74 件 (有効回答 68 件) について分析した。

対象の約 90% が女性、40% が 60 歳代だった。被介護者の 25% が認知症、38% が介護者の実母、46% は介護区分の要介護 3 以上だった。介護期間は 3 年から 5 年が 25% と最多であった。調査対象の介護者以外の家族介護者が居ない者は 36% だった。介護の場所は介護者及び被介護者の自宅が全体の 67% だった。14.9% がアドバンス・ケア・プランニングを実施していた。家族介護者 QOL 得点は中央値と平均値共に 114 点であり、SOC との間に正の相関を認めた ($r=.426, p<.0001$)。

表1. 対象の概要

		n=68 (項目により回答数異なる)		n (%)
年齢	20-30歳代	2 (2.8)	被介護者の要支援1・2	6 (9.0)
	40-50歳代	24 (35.3)	介護保険区分 要介護1	16 (23.9)
	60歳代	29 (42.6)	要介護2	11 (16.4)
	70歳代	7 (10.3)	要介護3	9 (13.4)
	80歳代	6 (8.6)	要介護4	10 (14.9)
性別	男性	7 (10.3)	要介護5	12 (17.9)
	女性	61 (89.7)	申請中	3 (1.0)
配偶者有無	既婚	52 (76.5)	被介護者の疾患 悪性新生物	1 (1.5)
	未婚	14 (20.6)	慢性疾患・難病	10 (15.2)
	その他	2 (2.9)	認知症	17 (25.8)
被介護者	祖父・祖母	3 (4.5)	2つ以上の慢性疾患	21 (31.8)
	実父・義父	8 (11.9)	その他	17 (25.8)
	実母・義母	35 (52.2)	介護の場所 病院	5 (7.5)
	配偶者	13 (19.4)	介護者の自宅	27 (40.3)
	兄弟・姉妹	1 (1.5)	被介護者の自宅	18 (26.9)
介護期間	両親	4 (6.0)	ホスピス	0 (0)
	その他	3 (4.5)	老人ホーム	13 (19.4)
	~1年未満	9 (13.6)	その他	4 (6.0)
	1~3年未満	14 (21.2)	自分以外の	いる 42 (62.6)
	3~5年未満	17 (25.8)	介護者	いない 24 (35.8)
QOL	5~10年未満	12 (18.2)	その他	1 (1.5)
	10年以上	10 (15.2)	最終学歴 中学卒業	2 (3.1)
	その他	4 (6.1)	高校卒業	9 (13.8)
	平均点・中央値	114点	専門学校卒	38 (58.4)
	SOC	平均点60点・中央値57.5点	大学卒業、以上	16 (24.6)
世帯年収	50~200万円未満	13 (20.3)	就業状況 正規雇用	19 (28.4)
	200~300万円未満	19 (29.7)	パートタイム	10 (14.9)
	300~500万円未満	18 (28.1)	無職	32 (47.8)
収入	500~700万円未満	10 (15.6)	その他	6 (9.0)
	700~900万円未満	3 (4.7)		
	900万円以上	2 (3.1)		
宗教	仏教	56 (83.6)		
	キリスト教	3 (4.5)		
	無宗教	5 (7.5)		
その他	1 (1.5)			
	57 (85.1)			

(3) 今後の課題

日本人家族介護者 QOL の可視化及び定量化研究の必要性を感じた着想当時は高齢者や慢性疾患・虚弱化から終末期 (看取り) の患者ケアの受皿を地域・在宅へ移行させ、地域住民が住み慣れた地域で最期まで安心して生活できるような在宅医療介護サービスの提供体制を含む地

域包括ケアシステムの構築が急務とされる時期であった。しかし、2019年12月中国武漢に始まった新型コロナウイルス感染症（国立感染症研究所 2020）パンデミックから3年以上に渡るコロナ禍や紛争と経済低迷も相まって、2020年以降からは地域包括ケアシステムの評価や高齢者支援だけでなく、経済、労働人口、紛争、移民、多様化、少子化や子育て支援、働き方改革等多方面、特に少子化対策への注目が集まってきた（こども家庭庁 2023、御船 2023、野村 2022、菅 2022）。このように変化著しい現在こそ、これらの様々な課題対応と並行して未だ課題の多い地域包括ケアシステム及び地域・在宅における高齢者や障がい者とその家族介護者への支援について継続的に取り組み続けることが重要だと考える。開発した家族介護者QOL尺度の試験は目下データ収集の最中であり、本助成期間終了後も継続する。できるだけ早期に次段階の試験である実用化及び応用のための縦断的研究等に移行して、家族介護者、ひいては被介護者の支援に役立てたい。

参考文献

- 1) 厚労省 <https://www.stat.go.jp/data/jinsui/2022np/index.html>（2023年5月26日閲覧）
 - 2) Leininger M. Nursing and anthropology: Two worlds to blend. New York: Wiley & Sons, 1970.
 - 3) Hall, Edward T. The silent language. Anchor, 1973.
 - 4) Hall, Edward T. Beyond culture. Anchor, 1976.
 - 5) 波平恵美子. いのちの文化人類学. 新潮社, 1996.
 - 6) Douglas, Mary. Implicit meanings: Selected essays in anthropology. Psychology Press, 1999.
 - 7) Helman, Cecil. Culture, health and illness. CRC press, 2007.
 - 8) Arno, Levine, Memmott. The Economic Value of Informal Caregiving. *Health Affairs*. vol.18(2) :182-8. <https://doi.org/10.1377/hlthaff.18.2.182>, 1999.
 - 9) The National Alliance for Caregiving (NAC) and the AARP. Caregiving in the U.S. 2015. https://www.caregiving.org/wp-content/uploads/2020/05/2015_CaregivingintheUS_Final-Report-June-4_WEB.pdf
 - 10) Cohen, Robin., Leis Anne., Kuhl, David., Charbonneau, Ce'cile., Ritvo, Paul., Ashbury, Fredrick. QOLLTI-F: measuring family carer quality of life. *Palliative Medicine*. 20:755-67.2006.
- * Taylor, Charles. Modern Social Imaginaries. *Public Culture*. Vol.14(1): 91-124.2002.
- * 星野命. クロス・カルチャ思考への招待 異文化間体験の心. 読売新聞社,1992.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山口智美
2. 発表標題 文化と看護とICT
3. 学会等名 日本医療情報学会看護学術大会 教育講演 （招待講演）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

ホームページ等 http://www.kwassui.ac.jp/~s_yamaguchi/
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	井口 悦子 (INOKUCHI ETSUKO) (20363476)	活水女子大学・看護学部・教授 (37405)	
研究分担者	當山 裕子 (TOYAM YOKO) (90468075)	琉球大学・医学部・准教授 (18001)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	コーエン ロビン (Cohen Robin)	(元) マギル大学・Palliative Research Center・Professor	
研究協力者	岡村 純 (Okamura Jun)	(元) 日本赤十字看護大学・大学院看護学研究科・教授	
研究協力者	宇座 美代子 (Uza Miyoko)	名城大学・大学院看護学研究科・教授	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関